

紀要『人文・自然研究』第19号

尊王攘夷のゆくえ：鹿鳴館時代の物語

松原真



2025年3月25日発行

一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究 第19号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 19



2025年3月25日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中2-1

組版：精興社

尊王攘夷のゆくえ：鹿鳴館時代の物語

松原真

一 はじめに

本稿は、明治二〇年（一八八七）前後に公表された尊攘思想、とくに攘夷思想（反西洋思想）に関する物語を考察するものである。

明治二〇年四月二〇日、内閣総理大臣伊藤博文の官邸で催された仮装舞踏会がいわゆる鹿鳴館時代（明治一〇年代後半～二〇年前後）の頂点をなすことはよく知られよう。周知のとおり、この夜会は欧化政策の産物であった。そして欧化政策は不平等条約の改正であり、国権の回復・伸張を企図して実行されたものであった。しかし、当時の人びとが、首相官邸で大々的に^{ファンシーボール}行われた仮装舞踏会の意義を認めなかったことは言うまでもない。たとえば、ある小新聞の社説は、この「百奇夜行会」について以下のように自問自答している。

伊藤伯ハ何が故の為に之を催ふしたるや曰く吾れ之を知らざるなり然らバ則ち伊藤伯
之を催ふさバ紳士勢客ハ何が故の為に斯く先を争さふて熊と為り和尚と為り賤の女と
為り武士と為り山伏と為り美人となり或ハ忌むべく嫌ふべきの極なる盗賊の張本に
まで打扮れるや曰く他なし伊藤伯の權威徳望両つながら高きに由るなり權威の高き
所ハ人尊とんで之に從がひ徳望の厚き所ハ人己れを制して之を景慕す是情の常の
み（夢美人楼主人「看よ百奇夜行会を」、絵入自由新聞、明二〇・四・二四）

仮装舞踏会が開催された理由は分からないが、「紳士勢客」がこぞって珍妙な仮装をするのは主催者伊藤博文の「權威徳望」のためだ、と社説は言う。初代内閣総理大臣たる伊藤が音頭を取れば、貴顕ですらおとなしく追従せざるをえないというわけだ。伊藤に公然と逆らえる者など日本社会には存在しない、という認識がここにはある。

この明治二〇年前後に、尊王攘夷に関する物語が少なからず制作されていたことは、注目されてよいと思われる。尊攘思想、とくに攘夷思想（反西洋思想）が鹿鳴館時代の政治体制と相容れないのは言うまでもなく、であるとすれば、物語はそれをどのようにえがくのか。尊王攘夷が近代日本の成り立ちを説明するに当たり最も重要な思想のひとつである以上、この問いは、小説史だけではなく、日本社会の歴史を考えるうえでもひとつの視点を提供すると思われる⁽¹⁾。

二 水戸尊攘派その後

尊攘思想に関する物語の主人公には、水戸藩出身の志士がまず挙げられる。早くは松村春輔『近世桜田紀聞』（明八～九）があるが、水戸尊攘派を主人公とする物語が本格的に制作されはじめたのは明治一〇年代後半であり、たとえば小室案外堂『勤王為経新編大和^{民権為緯}』



錦』(明一六)や、『勤王^{実伝}桜田血染の雪』(同)、『尊攘紀聞筑波夢』(明一七)、『筑波水滸伝』(同)などの高瀬真卿の諸作品が公表された⁽²⁾。ほか、武田耕雲斎に見出されて天狗党の一員となる少年の復讐物語、二世花笠文京『檻樓^{つづれにしき}の綿繡』(絵入自由新聞、明一六・一二・一八～明一七・四・一五)⁽³⁾や、公武合体派を討たんと身をやつして活動する水戸尊攘派の兄弟の物語、『^{余聞}花吹雪』(無署名、同、明一九・四・一六～六・一三)などもある。

しかし、本稿の考察したいのは、これら幕末を主要な舞台とする物語ではなく、その後の物語である。明治二〇年前後になると、水戸尊攘派のゆくえをえがく物語が散見されるようになるのだ。では、その後の彼らはどのように物語化されていたのか。まずは『義兄は鎖港者^{義弟は開化者}あわせかみふじとつくばね合鏡富岳亦筑嶺』(無署名、絵入朝野新聞、明一九・六・二〇～七・三〇)を取り上げた。これは攘夷派の兄と開明派の弟の物語であり、兄の名が天狗党の挙兵した筑波山に、弟の名が富士山に対応している。梗概を私に記す。

水戸藩の義兄弟、筑波真一郎(兄)は攘夷鎖港家であり、富士谷吉之丞(弟)は開明派であった。徳川斉昭の逝去後、兄弟はそろって武芸修行の旅に出る。筑波は鎌倉にて靴を脱がずに八幡宮拝殿に入った米国人に憤怒し、そのひとりを斬殺する。富士谷は筑波を救うためにやむなく太刀を抜き、その後、ふたりは別々に遁走することになる。筑波は一旦幕吏に捕縛されるも、別の人物が身代わりに処刑されたので放免となり、長州側の官軍として鳥羽伏見の戦いに参加する。一方、弟の富士谷は水戸藩出身の開明派山本要斎に匿ってもらい、要斎の周旋で横浜居留地の英国人のもとに身を寄せ、英学や商法を学び、その英国人に気に入られて倫敦に行くことになる。明治期に入り、富士谷は商法学を修めて帰国し、要斎死後に芸妓となっていたその娘と結婚する。兄の筑波はある旧藩知事の若君の和漢教授を任され、身代わりに処刑された人物の娘と結婚する。

兄の筑波は過激な反西洋主義者であり、「我神国を辱しむる夷狄^{わがしむこくはづかいてき}」(六・二四)だけではなく、その側に立つ「腰拔武士^{こしぬけぶし}」(同)にも強烈な敵愾心を抱く。しかし、彼が維新後の世界、つまり尊王攘夷が尊王開国に転じた世界をどのような胸中で生きているのか、本作には書かれていない。本作が生き生きとえがきだすのは兄(筑波山)ではなく、弟(富士山)の立身出世物語なのだ。弟の富士谷は要斎に「攘夷鎖港^{じやういさかう}の行^{おこな}はれずして万^{まむ}一^{しひ}強いてなさむとすれバ^{たちまふかうまね}忽ち不幸を招くこと」(六・二七)を諭され、洋学修行をしてロンドンにまで行き、帰国後の演説で「商業^{しやうげふ}を以て国^{もつ}を起し^{くにおこ}商業^{しやうげふ}を以て国^{もつ}を維持する其概略^{みぢそのあらまし}の主意^{しゆい}」(七・二一)を説いて拍手喝采を浴びる。つまり、本作では、この弟の説く未来こそが日本社会の理想とされるのである。一方、兄は未来について何も語ることができない。

同様の作品に、『春雨物語』(無署名、絵入朝野新聞、明一九・三・七～四・一一)がある。本作には複数の主人公格が登場するが、ここでは水戸浪士清水誠一を中心にまとめておく。幕末、開明派の医師高井玄水は鎖港党に暗殺される。その娘お君は悪漢により遊郭に売られ、清水の馴染みになる。しかし清水はお君の父親の名前を聞いて別れを切り出す。実は清水は桜田門外の変を起こした水戸浪士と交流を持つような人物で、高井玄水を暗殺した一味のひとりなのであった。清水はその後京都に行き、学問を修めることで鎖港論の不可なることを悟り、東京へ帰って商人となる。京都で覚えた洋語を駆使して資金を貯め、築地に店舗を構えるまでになる。ほかの主人公格の人物から、文明開化の世に仇敵のことは気にする必要がないと説かれ、清水はお君と結婚する。

本作では反西洋主義者の転向が明確にえがかれる。ペリー来航後、鎖港党(攘夷派)となり、開明派知識人を暗殺するまでに過激な反西洋主義者であった清水誠一は、西洋の学問を修めることで思想的に転向する。



そのころけいし　なだか　がくしなにがし　もむ　い　はじ　えいしよ　まな　や　がくもむ　すゝ
当時京師に名高かりし学士某氏の門に入り初めて英書を学びしが稍や学問の進むに
したが　けいざい　せい　ち　その　と　ところち　みつ　ろむ　ところせいかく　かの　こうまう　をし
随ひ経済にまれ政治にまれ其説く所緻密にして論ずる所正確なる彼の孔孟の教へよ
はる　まさ　おもしろ　しみず　おお　ざと　ひら　さき　とな　さ　かうろむ　ころ　はづ
り遥かに勝りて面白ければ清水ハ大いに悟りを開き曩に唱へし鎖港論さへ心に差るば
かりにて（三・二三）

儒教よりも西洋の学問の方がはるかに面白いと感じた清水は鎖港論を捨てる。このよう
な清水であるから、「貴兄の為にお君どのハ縦令 敵で有ながら過去りし事を今更に兎に角
云はむハ頑固に似て当世開化の人にハあらず」（四・一〇）という他人の説得に抵抗する
ことなく同意し、かつて自身が暗殺した開明派の娘と結婚するのである。

攘夷思想に固執するのではなく、西洋的な学問を修めてその優れた点を認め、立身出世
を果たす。明治期の体制下では、このような主人公が推奨された。明治政府の論理と決し
て衝突することなく、その枠内で現世的幸福を手に入れる主人公である。『合鏡富岳亦筑
嶺』も『春雨物語』も、攘夷思想（反西洋思想）を抑え込み、新たに実業という道を提示
する物語であった。

明治政府との衝突を回避することで現世的幸福を手に入れる主人公の推奨は、尊攘派の
子世代を主人公とする場合でも変わりはない。佐伯半鼻『志士後談花吹雪』（朝日新聞、明二
〇・四・一五～五・二一）⁽⁴⁾がその例である。

本作の主人公は、天狗党に参加し、その後闇討ちにより死亡した水戸志士の息子国重龍
二郎である。自由党员である龍二郎は、政治資金のために実業家服部良一に借金を依頼す
る。しかし服部良一は政治よりも実業を重んじる思想の持主なので、その依頼を断る。そ
こで龍二郎はある金満家から借金をすることにするが、この金満家は龍二郎の妹を妾にし
ようと企む人物であった。それを知った龍二郎は苦境に陥るが、服部良一が現れて金を出
す。実は服部良一は龍二郎の実兄国重龍太郎であり、弟の政治偏重の姿勢などを慮って今
までそれを黙っていたのだった。龍二郎は今後は政治に偏重することなく実業に着手する
と決意し、かねてより知己であった女と結婚する。

本作は天狗党の息子の物語であり、幕末の尊攘派と共通して現体制に対して反抗心を抱
く者を主人公とする。舞台は「人 苟 にも政党に入らざれば人にあらず政党に加らざれば
愛国心なきものなり」（四・二二）とされ、「政党論の一方には人気頗る沸上り固り腕力
を斥く時節とは云へ何となく言論に殺伐を含みつゝ」（同）ある明治一〇年代中ごろで
あり、そのなかで国重龍二郎は自由党の壮士として熱心に政治活動を行うのである。

しかし、龍二郎はそのままでは現世的幸福を手に入れられない。つまり、自由党の政治
活動に没頭している壮士の人物に、物語は幸福な結末を与えない。彼は実業家の兄に諭さ
れて政治偏重から一步退くことによって、つまり明治政府との衝突を回避することによ
って、物語から幸福な結末を与えられるのである。子世代の物語であっても、『合鏡富岳亦
筑嶺』『春雨物語』と提示される幸福への経路、つまり反体制活動から実業へという経路
はおなじであった。

西峡逸史『飄零夢の世がたり』（絵入朝野新聞、明二一・三・二五～五・六）も見ておく。
本作の主人公は、旧水戸藩の物頭の息子大山登である。東京大学院に通う秀才大山登は、
旧水戸藩内の割烹店で開かれた懇親会にて芸妓お花を見初め、深い仲になる。お花は桜田
門外の変実行者の水戸浪士のひとりを伯父に持つ孝行娘であった。大山はお花に耽溺し、
学校を抜け出してお花に会いに行く。お花にそのことを戒められた大山は自殺しようとする
が、ある伯爵に制止され、伯爵家の書生になる。大山は一旦お花への恋情を絶って洋行
することにし、帰国後、お花と結婚する予定である。



本作の主人公大山にとって、明治政府の論理にしたがって生きることは疑う余地のない前提となっている。彼は明治政府の設定した教育制度にしたがって生き、明治政府の設定した華族制度により爵位を得た人物に保護された後に、留学して西洋の知識を身につけ、現世的幸福を手に入れる。そもそも思想的な転向の必要がないほどに、当初からこの主人公には明治政府の論理が浸透しているのである。

三 水戸尊攘派その後（承前）

だが、明治二〇年前後は、明治政府あるいは伊藤博文内閣に対する不満が急激に高まった時期でもあった。本稿冒頭で触れたような政策に対する不満は、周知のように、明治二〇年の後半に全国で噴出することになる。本節では、現体制へのそのような不満を背景に成立した、水戸尊攘派の系譜に連なる主人公の作品を取り上げたい。

まずは、宮崎夢柳『芒の^{すすき}ひと^ひら^{むら}叢』（東雲新聞、明二一・一・一五～三・九）⁽⁵⁾を見てみたい。天狗党首領の遺児の活躍をえがく本作は、およそ三つの舞台、すなわち（1）幕末日本、（2）明治日本、（3）ロシアからなる。これらに沿ってストーリーをまとめておく。主人公夫婦に暗殺されるハクブノップは伊藤博文を暗示する。

- （1）幕末、水戸藩士児島豊前は尊攘派（正義党）の一人で、正義党内で争っていた武田伊賀正（^{いのかみ}耕雲斎）と藤田小四郎を和解させる。しかし藩内の佐幕派（俗論党）の策略により、武田・藤田らは処刑される。児島は脱藩し、維新後に武田の遺児文子を養女とする。
- （2）成長した文子は露国虚無党の事情を記した冊子を読み、そのなかの^{ソフィヤ}蘇比亜の伝に感動して、蘇比亜のようになることを決意する。ある日、文子は養父児島と訪れた日光にて壮士三浦卓に出会い惹かれる。しかし、卓は国事犯の嫌疑で逮捕されてしまう。臨時重罪裁判所にて公判が開かれ、文子は卓の嫌疑を晴らすため弁護に立とうとする。
- （3）露西亜の^{モスコ}莫斯科近辺で若い夫婦が陸軍中将兼警視長官ハクブノップを爆裂弾で暗殺する。この夫婦は、先の裁判で無罪となった後に児島家に婿養子に入った卓と、文子であった。ふたりは児島死後、虚無党入りし、压制者のハクブノップを暗殺したのである。しかし文子は警吏憲兵に深手を負わされ死亡し、卓もその後捕まり死刑となる。愛息が亡き両親の遺志を継いで虚無党の若き首領となり、母文子の髑髏を墓場から掘り起こして悲愴慷慨の演説をし、党勢を拡大させる。

本作において水戸尊攘派は、維新革命の精神の体现者として表象される。この点は本稿第二節の最初に挙げた、小室案外堂や高瀬真卿の幕末を舞台とする作品群と変わりはないが、しかし、その精神を近代世界にそのまま応用しようとする点に本作の画期性がある。（1）の幕末日本で発生した革命精神としての尊王攘夷はどうすれば持続的に発展できるのか。（2）の明治日本を舞台とする場合は無理であった。そこでできることと言えば、現体制にかけられた嫌疑を晴らすことがせいぜいである。

このとき、明治日本から脱出するという選択肢が出てくる。選ばれた舞台が（3）のロシアであった。舞台を明治政府の論理の届かない場所とすることで、压制者のハクブノップ=伊藤博文を打倒するというストーリーが可能となり、併せて、水戸尊攘派の維新革命の精神が近代世界で持続的に展開していくというストーリーが可能になるのである。

しかし、明治日本を舞台としながら、内閣総理大臣の暗殺を志向する主人公もえがかれ



ていた。それが須藤南翠『大義唐松操』(改進黨、明二一・四・二一～七・一五)である。暗殺を計画される伊富広章は伊藤博文がモデルである⁽⁶⁾。

幕末、愛宕山に妖怪が出るという噂があり、浪士の唐松操(当初は高木緑)は退治のために愛宕山に入る。すると天狗党の残党大洗五十丸がおり、愛息を託される。下山後、唐松は勲功を立て、伊富広章の推挙もあって維新後に大判官にまで出世する。この伊富は以前、二度にわたり唐松の命を救った大恩人でもある。明治一〇年代後半となり、唐松は政治的な大事件(福島事件)に公明正大な判決を下すが、伊富は輿論におもねったとして唐松を恨む。その後、唐松は伊富の欧化政策に激しく反対するふたりの将軍より伊富暗殺計画を持ちかけられ、同意する。しかし暗殺実施の当日である仮装舞踏会の日、唐松は泥酔したふりをして伊富に危機を示唆する。結果、計画は失敗に終わる。両将軍は解職となり、唐松に対して激怒する。実は生きのびていた大洗五十丸が唐松家を訪問したその夜、唐松は自刃する。

本作は以下の庶民の述懐からはじまり、物語全体の方向性を読者に示す。

斯なツたらモウ世の中ハ暗闇ぢや京都近い此の愛宕山に夜陰で、もあらう事か白昼妖怪が出て人を捕食ふといふのハ神や仏も御威徳がなく成つたものと見えるハ是れといふのも関東で彼の毛唐人を引入れて寵愛なさるから神の御国の日本も常闇の世となつたのぢや(四・二一)

庶民の目線から、西洋人を重んじる体制のために世情不安(妖怪)が生じているという認識が示される。作品冒頭のこの素朴な認識は、これから始まる物語の方向性を形作るであろう。そしてその方向に沿って進めば、不安定な状態を解決するためにその原因を取り除くという発想が生まれるはずだ。実際、本作は、「近來著るしく欧羅巴主義に傾」(六・二八)く伊富広章の暗殺を計画する者たちの物語なのである。天狗党の残党から愛息を託された主人公唐松は、「有爵政治」「舞踏会」(同)を夢想する権力者を打倒する側に一度は立つ。

しかし、本作はそのような方向性を示しながら、伊富暗殺計策を失敗に帰着させるのであった。両将軍の計画に同意した唐松に対して、語り手が「独り怪むべきハ唐松操が心事なり」とし、以下のように述べる。

其の一家の私事と一身の榮譽との救護ハ言はずもあれ唐松の生命ハ伊富の爲めに再度の恩に依て繋ぐを得たり然るに今や其の再三生の恩を仇とし将軍と、もに謀つて匕首を之が胸に刺へんとなせるなり(中略)男心と秋の空とハ独り恋のみにハあらざる乎⁽⁷⁾

ここでは暗殺計画への加担が、大恩人に対する裏切りという観点から解釈される。いかに政治思想が異なろうとも、あるいは日本社会のためだと言おうとも、伊富暗殺は恩を仇で返す不徳行為であるというわけだ。このような価値観が、計画実施の直前になって、伊富にその危機を知らせるという唐松の行為を導き出すのであろう。結果、唐松は冒頭で示された本作の方向性に逆らうことになり、実は生きのびていた天狗党の残党の訪問を引き金として、自刃という結末を迎えるのである。

主人公唐松操は伊富の暗殺計画に加担すべきか、伊富を救助すべきかで苦慮するが、そのような苦慮は本作全体のものでもある。そのことは天狗党の残党から託された愛息清丸



に対する扱いからも知れる。反西洋思想の象徴的な存在としてストーリーに関わらせることも可能だったであろうこの人物を、本作はついに単なる脇役で終わらせる。清丸がすることと言えば義妹への恋愛感情に悩んだ末に結婚することであって、彼は伊富暗殺計画にも反西洋思想にも関係してこないのである。天狗党の愛息をこのような傍流的な存在に終始させざるをえなかったところにも、反西洋主義的なストーリーを志向しながらもそれを断念せざるをえないという、本作の苦慮が読み取れるのである。

『芒の一と叢』と『唐松操』に共通するのは、現体制に不満をいだき、打倒を志向したとしても、明治日本を物語世界とするかぎりは実行できないということだ。つまり、主人公が明治日本にとどまっているかぎり、主人公の尊攘思想あるいは革命精神を実行に移すことはできないのである。

四 明治二〇年代の尊王攘夷

ここまで、水戸尊攘派の系譜に連なる主人公の物語を見てきた。まずは維新後、明治政府の論理に合わせて転向する主人公がえがかれるが、それにとどまらず、鹿鳴館時代の体制への不満を背景に、過激な反政府活動を志向する主人公もえがかれていたのである。最後に、明治二〇年代初めに公表された、尊攘思想、とくに攘夷思想（反西洋思想）のゆくえを示す作品を取り上げておきたい。

『芒の一と叢』も『唐松操』も、初代内閣総理大臣の暗殺を志向する物語であるが、明治日本においてそれを実行することは回避されていた。それではもし、主人公が大臣を殺害するような物語になったとしたら、作品にはいかなる運命が待ちかまえていたのだろうか。それを教えるのが前田香雪『誓祝ひの日』（絵入朝野新聞、明二二・二・一九～三・六中止）である。本作は、初代文部大臣たる森有礼の暗殺事件に関する時事小説である。登場人物の石野紋太郎は暗殺犯の西野文太郎がモデルであり、森田屋お三木は森有礼を暗示する。

憲法発布式の日、敬神家の壮士石野紋太郎が他出する。その後石野という乱暴書生が大臣を斬り、その場で斬殺されたという号外が出る。森田屋の芸妓お祐は石野という名前に驚く。お祐は石野武太郎と相思相愛の仲であり、石野とは武太郎のことではないかと心配するのである。一方、森田屋の主人お三木は夫の死後、外国人（西洋人）の語学教師と深い仲になっており、その外国人の意にしたがって神棚を廃棄する。また、お三木はお祐に横恋慕する加治木麻九郎を冷淡に突き放し、激怒させる。外国人の提案で、お三木が大礼服の衣裳で仮装し写真を取るようになったその日、加治木が押しかけてきてお三木を刺す。加治木はその場で刺殺される。

本作では、石野紋太郎＝西野文太郎による大臣暗殺事件と、加治木麻九郎によるお三木殺人事件が寓意的に重ね合わされている。お三木は外国人と深い仲になり、神棚を廃棄したり大礼服の仮装をしたりと外国人の意向に唯々諾々としたがう。加治木はその仮装をしたお三木を刺す。この殺人事件が、憲法発布式の当日、現実世界で起こった暗殺事件を露骨に連想させることは言うまでもない。作者が「此稿と相似たる事も稀にはあるべけれど其は只偶ま合へるのみにて人も事も悉皆架空の作物語」（二・一九）といくら強調したとしても、この物語を単なる虚構とすることは土台無理であった。結果、本作は筆禍の対象となる。

去る六日発兌の我が絵入朝野新聞は治安に妨害あるものと認められ翌七日より発行停



止する旨の厳命を蒙るに遇ひ社員^{いかに}の驚き一方ならず早速打寄て当日の紙面を取調べ見たるも吾輩不肖にして此所ぞ別段治安に妨害ありと思はるゝほどの箇所を見出す能はざりしも如何せん既に其命一たび下りたる事なれば爾来謹んで刊を停め業を休み社員一同毎日空を仰で只管解停の恩命をのみ待ち居たりしに（「解停に就て読者諸君に謝す」絵入朝野新聞、明二二・三・二一）

発行停止が解除された直後の紙面からの引用である。絵入朝野新聞は三月六日の紙面が治安妨害に当たるとされ、二週間の発行停止となった。思い当たる節はないと引用にはあるが、筆禍の原因となったのが『祝ひの日』であったことは間違いない⁽⁸⁾。三月六日はお三木殺害の場面の日であり、大礼服のお三木が出刃包丁で腹部を刺される挿絵（図版）の生々しさと相まって、当局から治安妨害とみなされたのであろう。本作はその日をもって連載中止となった。

明治政府の管理下で公表される以上、小説であっても国家枢要の人物を打倒することなど不可能なのだ。もしそれを実行したならば筆禍をこうむり、作品は存続しえない。『芒の一と叢』『唐松操』が明治日本において総理大臣を暗殺するストーリーを回避したのは、これを考慮してのことであった。

では、当時、尊王攘夷を具体的に実行に移す物語は不可能であったのだろうか。実際にはそうではない。ヒントはすでに『芒の一と叢』にあったと言えよう。舞台を明治日本以外の場所にしてしまえば、明治日本の権力者を連想させる人物を打倒するというストーリーが可能であった。とすれば、主人公が国外に飛び出せば、尊王攘夷を実行することが可能であるということになろう。それを示すのが、いわゆる国権小説の代表作、矢野龍溪『報知浮城物語』（郵便報知新聞、明二三・一・一六～三・一九）⁽⁹⁾である。作良義文・立花勝武という両英雄の活躍をえがく著名な作品であるが、便宜上ふたつのブロックに分け、ストーリーをまとめておく⁽¹⁰⁾。



- (1) 余（上井清太郎）は偶然のことから作良義文・立花勝武と名乗る人物に出会う。

作良・立花が海外に旅立とうとしていることを知り、志願して書記兼通訳として同行する。作良・立花を首領とする一行はグリーガン群島の無人島で、雷薬と称する、作良と化学士官の発明した強力な爆薬の試験などを行う。これらの兵器を装備した汽船を海王丸と名付ける。ラボアン湾沿岸にて原住民と交易を行うが、その原住民に夜襲をかけられたので、雷弾（雷薬の砲弾）で村落を延焼させる。次いで、シリク岬付近で海賊に乗っ取られた巡洋艦（欧州造船会社製）から砲撃を受けたので、その巡洋艦を奪って浮城と名付ける。（第二二回、二・六まで）

- (2) オランダ阿蘭領東印度諸島の首府バタビヤに行くが、浮城を海賊船とみなされ、上陸していた士官の一人が捕縛される。談判に向かうも阿蘭鎮台から砲撃を受けたので、雷弾を放って敵の砲台を破壊する。作良・立花による作戦で、阿蘭領事を拉致し士官との交換交渉を行うも、阿蘭鎮台は士官が死亡したと虚偽の報告をしたうえに、領事の返還を受けた後に五つの軍艦で浮城・海王丸を襲撃してくる。海戦となり、浮城は阿蘭



軍を敗走させ、救援要請によりやってきた英国軍艦をも敗走させる。浮城の活躍が噂となって原住民蜂起の気運が高まり、作良・立花らはその気運が最も高い空軽太・横軽太の二地の国王らとともに戦い、東印度諸島より阿蘭人を駆逐する決意をする。阿蘭軍との戦争がはじまり、一度は苦境に陥るも雷薬を用いた大白砲の威力などによって由楽坡の決戦に勝利する。しかし国王が作良・立花らに無断で阿蘭側と講和を結び、戦争は終わる。作良・立花らは憤怒するが講和を受け入れることにし、阿蘭側から士官を返還させ、償金百万円を得る。(第六三回、三・一九まで)

本作は分量的にも内容的にも、(2) すなわちオランダとの戦いに重きを置いている。(1) はいわば(2)の準備期間なのである。(1)は強力な兵器と強力な軍艦を味方の手中に収めるまでの過程としてあり、本作はこれを前提として(2)の戦闘に入り、作良・立花らが一度は苦境に陥りながらも劇的な勝利を収めるのをえがく。(2)は派手なアクションシーンの連続なので、ここに本作の山場が置かれているのだ。そしてこの(2)は、管見によれば、尊王攘夷を実行に移したものであったのである。

作良も立花も尊王家である。作良は自室に「両陛下の写真」を飾り(一・一九)、「如何なる僻隅に在るとも十一月三日の天長節は必ず共に之を祝せん」(一・二四)と言ひ、立花もまた、「今我々大業を海外に立てんと欲するも其心、日本を忘れず尚ほ陛下の民たらんことを希ふ者なり」(同)と言う。

かつ、両者ともに、攘夷思想の持主であった。そのことは(2)で露わになる。作良は現地の国王らとともにオランダ鎮台と戦うに当たり「其の本国に於けるや、信義を重んじ礼節を尊ふと称しなから其の一たひ足を他洲に容るゝに及ては非法無礼、他の人種を遇する幾んど禽獣を以てす、我々豈に天に代て彼等の暴横を懲らさゝるを得んや」(三・五)と西洋人の暴政を強く批判する演説をぶち、立花もまた、「大英なれ小英なれ、女皇なれ男皇なれ、欧洲諸国の帝王公侯、我に於て何か有らん」(二・二四)、「若し今ま此艦(注、英国艦)を一撃打壊せハ以て碧眼奴の胆を破るに足らん」(三・三)と西洋人への対抗心をむき出しにして息巻く。このような過激な反西洋思想に基づいて作良・立花はオランダ軍と戦い、西洋人を東インド諸島から駆逐しようとするので、彼らの活躍をえがく本作が尊王攘夷の物語的な実践であることは明らかであろう。

注意すべきは、作良・立花が国内政治をまったく眼中に入れていないことである。つまり、西洋人に追従する明治日本の権力者を討つのではなく、国外にて直接的に西洋人を討つという発想が本作にはある。このとき何が起きるか。それは、尊王攘夷の物語が明治政府との対立関係を解消し、それどころかまるでおなじ夢を追い求めているかのように装えるようになるということだ。本作も明治政府も、国権の伸張を目指す点ではおなじだからである。西洋人の暴政に憤怒し彼らを駆逐すべく戦う英雄をえがく本作も、条約改正を目指して西洋社会を模倣する明治政府も、日本国あるいは日本人の国際的な存在感・威信の向上をめざす点ではとくに変わらない。

かくして、本作は、明治政府の論理と衝突することなく、尊王攘夷を具体的に実行する方法を発明したのである。筆禍の憂いなく、過激な反西洋思想を実行する方法である。(2)のオランダ・英国軍艦との戦いやオランダ鎮台との戦いは、明治政府に介入される怖れのないやり方で行われる、つまり明治政府と志向を一致させるというやり方で行われる尊王攘夷の実践なのだ。



五 おわりに

以上、鹿鳴館時代、とくに明治二〇年前後に公表された、尊王攘夷のその後に関する物語を取り上げ、考察してきた。攘夷思想（反西洋思想）は同時代の権力者と衝突してしまう思想であり、このとき物語は尊王攘夷のその後をどのようにえがきだしていたのか。考察をまとめておく。水戸尊攘派のその後に関する物語では、明治政府の論理に合わせて転向する主人公がまずは推奨された。主人公は攘夷の不可なることを悟ったり、反体制活動から実業へ移行したりすることで現世的幸福を手に入れる。しかし、水戸尊攘派の系譜に連なる主人公が明治政府の権力者、具体的には初代内閣総理大臣たる伊藤博文の暗殺を志向する物語も制作されていた。ただし、明治日本を物語世界とするかぎりには、暗殺の実行は回避される。回避されたのは筆禍に遭うからであり、実際、国務大臣の暗殺を寓意する物語は処罰を受けている。ここから日本を脱出して尊王攘夷を実行するという発想が生まれ、矢野龍溪『浮城物語』として結実する。本作は明治政府の論理と衝突することなく、国外にて尊攘思想、とくに攘夷思想を実行するという物語の方法を日本社会に提示した。

このようにして日本の小説は、近代世界に入った後も、尊王攘夷を追い求めつづけたのである。

注

- (1) 本稿と同様の問題設定を持つ先行研究は、管見の範囲では見当たらなかった。ご教示願う。
- (2) 以上の諸作品については柳田泉『政治小説研究』上巻（春秋社、一九六七年）を参照。
- (3) 初出無署名。著者名は単行本（絵入自由出版社、明一七）による。
- (4) 初出無署名。著者名は単行本（駸々堂、明二一）による。
- (5) 初出無署名。著者名は単行本（駸々堂、明二一）による。
- (6) 本作の詳細な梗概は柳田泉『政治小説研究』中巻（春秋社、一九六八年）に備わる。
- (7) 初出では七月二日の紙面に記載されたと推定される箇所。欠号につき単行本（文昌堂、明二二）二九四頁から引用した。
- (8) 森有礼暗殺事件に関する筆禍は多い。絵入自由新聞（明二二・三・九）によれば、絵入朝野新聞だけではなく、朝野新聞、『日本人』、『新世界』、『東京公論』も治安妨害の廉で発行停止となった。ほか、内務省警保局『禁止出版目録』第一編（国立国会図書館、一九七三年）には安寧秩序妨害の単行本として、『西野文太郎略伝』『古今百家伝西野文太郎』『故西野文太郎辞世』『絵入西野文太郎詳伝』などが挙げられている。同様の指摘は斎藤昌三『現代筆禍文献大年表』（粹古堂書店、一九三二年）にもある。
- (9) 原題は「報知異聞」で、単行本化（報知社、明二三）される際に「^{報知}異聞 浮城物語」とされた。
- (10) 本作の詳細な梗概は柳田泉『政治小説研究』下巻（春秋社、一九六八年）、および松本匡「矢野龍溪『浮城物語』」（『国文学解釈と鑑賞』五七一四、一九九二年）に備わる。

付記 本稿における引用は、絵入自由新聞・絵入朝野新聞・改進黨新聞は国立国会図書館のマイクロフィルム、朝日新聞はウェブサイト「朝日新聞クロスサーチ」、東雲新聞は部落解放研究所の復刻版、郵便報知新聞は柏書房の復刻版による。ただし、改進黨新聞は適宜ウェブサイト「宮武外骨蒐集資料」のものを参照し、『唐松操』は一部ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」の単行本（文昌堂、明二二）から引用した。引用に際して漢字、仮名ともに現在通行の字体に改めた。漢字表記、ルビ等に誤りと思われるものもあるが、一部を除いて原文通りとした。一部、不当・不適切な表現が見られるが、原文の歴史性を考慮しそのまま引用した。



The Stories of the Sonnō Jōi : On Novels in the Early Stages of Modern Japan

Makoto MATSUBARA

This paper discusses how novels represented the Sonnō Jōi (尊王攘夷) in the early stages of modern Japan. At that time, the Sonnō Jōi, especially Jōi (the anti-Western ideology), was an ideology that clashed with the Meiji government. Therefore, protagonists who would turn to conform to the logic of the Meiji government were recommended. The protagonists realized that anti-Western ideology was impossible, and they had attained happiness by moving from anti-establishment activities to business. However, there are also stories in which the protagonists aimed to assassinate a powerful person in the Meiji government, more specifically Hirobumi Ito, the first prime minister of Japan. Nonetheless, as long as the story was set in Japan during the Meiji period, the execution of the assassination was avoided. This is because such stories will be punished. This gave rise to the idea of escaping from Japan and implementing anti-Western ideology, which came to fruition as *Ukishiro Monogatari* (浮城物語). Without clashing with the logic of the Meiji government, this work presented Japanese society with the narrative method of carrying out the Sonnō Jōi outside the country.

